NEWSLETTER

【慶 祝】

中島巖先生の叙勲を寿ぐ

2015 年秋の叙勲において、長年本学会を応援してくださっている中島巖先生（関西大学名誉教授）が、その功績を認められ瑞宝小綬章を受章されました。誠におめでとうございます。

中島先生は心理学者で、発達心理学と言語心理学がご専門です。加えて、学術論文を英語、ドイツ語で執筆されるほど外国語が堪能で、国内外のドイツ語教育関係者との交流を通じて語学教育への造詣も深くていらっしゃいます。1968 年に関西大学文学部に教育心理学分野の専任講師として着任され、2000 年に改組編成にともない外国語教育研究機構に移籍、ドイツ語と言語心理学を担当されました。そして、2005 年に退職を迎えられるまでの 37 年間に学生部長をはじめ国際交流センター長など数々の要職を歴任されました。

国際交流センター長時代には関西大学とドイツのゲッティンゲン大学との学生交流協定の締結に尽力され、日独の相互理解の橋渡し役を務められました。

今日でこそ外国語教育研究の分野で言語運用能力を対人行動能力の一環として捉えようとするとき、中島先生が専門とされる心理学領域での理論が重要であることは、誰もが知るところであります。ですが、先生は外国語教育研究機構に移籍される前から、外国語教育研究をする際には、言語を記号と捉えてその体系を起点に研究するのでなく、社会的に行動する人間の心理過程に目を向けて分析し、そこで得た知見を言語能力育成に応用することの重要性を説いていらしたそうです。大多数の学会員は、中島先生が退職されてから外国語教育学研究科に入学しており、先生のお話を直接伺うことが叶いませんでしたが、研究大会の折りに好好爺然とした佇まいで、熱心に講演に耳を傾けられているお姿が印象に残っております。

本学会も 2016 年に設立 10 年を迎えます。中島先生には長年応援し続けていただいておりますことに、心より感謝いたします。

くれぐれも健康に留意され、末永く活躍されますことをお祈り申し上げます。

学会役員一同

（文責：戎 妙子）

※瑞宝小綬章：公務等に長年にわたって従事し、優れた業績を挙げた方に贈られる勲章

※参考・引用文献

杉谷眞佐子(2005). 中島巖先生に心からの感謝を込めて 『外国語教育研究』,9, 7-8.
中島巖教授略歴及び主要業績 『外国語教育研究』,9, 9.

2015 年度研究関連活動報告

2015 年度、外教学会では研究に関連して以下の研究大会、研究会を開催いたしました。いずれの回も授業実践、研究活動にすぐに役立つ内容で「学理と実際との調和」という関西大学の学是を体現する有意義なものでした。詳しい内容は各回の報告をご覧ください。

◆関西大学外国語教育学会 第 9 回研究大会

日時：2015 年 3 月 7 日（土）12:20～16:10
場所：関西大学千里山キャンパス　尚文館　501 教室

基調講演：
第Ⅰ部　正頭　英和先生（立命館小学校教諭）
「英語授業のマネジメントの心・技・愛ー小・中・高・大で変わらないこと」

第Ⅱ部　静　哲人先生（大東文化大学教授）
「音声指導の心・技・愛ー汝の部屋を掃除せよ、そして汝の生徒を愛せよー」

◆関西大学外国語教育学会 研究会 2015

日時；2015 年 6 月 21 日（日）13:30～17:20
場所：関西大学千里山キャンパス　岩崎記念館　4 階

第Ⅰ部 講演「人を惹きつけるプレゼンテーション」
講師:近藤　睦美氏　（帝塚山学院大学 准教授）

第Ⅱ部 ワークショップ「知らなきゃ損！論文の探し方、データ保存の仕方」
講師:山本　祐太氏　（関西大学大学院 博士課程前期課程 2 年生）

第 9 回研究大会報告
研究大会委員長　阿部 慎太郎

2015 年 3 月 7 日（土）、関西大学外国語教育学会第 9 回研究大会が関西大学尚文館において開催されました。一昨年より「新時代の外国語教育」を大会テーマとして進めてきましたが、今回は「時代を超えて変わらないこと」というサブテーマで、基調講演には、静哲人先生（大東文化大学教授）、正頭英和先生（立命館小学校教諭）をお迎えし、ご講演いただきました。研究大会当日は雨にもかかわらず、50 名もの方にご参加いただきました。

第 I 部で講演いただいた正頭先生には、小学校、中学校で教えられてきたご経験をもとに、生徒との接し方、生徒への指示、説明や指導の仕方など、クラスマネジメントについて様々な視点からお話いただきました。特に印象的だったのが、「ちゃんとしなさい」という言葉。「ちゃんと」はとても曖昧な言葉であり、生徒にはこちらの「ちゃんと」の意図が伝わっていないこともあるとのお話を聞き、教師一言一言の大切さを改めて考えさせられる興味深い内容でした。

第 II 部の静先生のご講演は、“Do you teach Engrish(English)?”の問いによる教師の発音に対する意識の大切さから始まりました。英語教育のプロとして、教師は学習者のモデルである事、また、学習者の小さなエラーも見逃さずに即座に指摘、改善する事の重要性に改めて気づかされる内容でした。他にも静先生の代名詞である歌を利用した教授方法の実演や英語においても、静先生が新しく考案された「イヌネコ・メソッド」や「オカリナ・メソッド」を紹介くださり、刺激的なご講演でした。

近年の外国語教育は ICT 教育の時代と言っても過言ではありません。確かに 21 世紀の今、これからの外国語教育に ICT が必要不可欠な存在であることは否めません。しかし、どれだけ ICT が発展しても、教える側も学ぶ側も「人」であり、人対人にしか出来ないこと、それが、まさに静先生、正頭先生のお話にあった「愛」なのだと感じました。

お忙しい中、ご講演くださいました静先生、正頭先生に心よりお礼申し上げます。

また、この度、本大会の開催にあたり尽力くださいました会長の吉田信介先生、神道美映子幹事長、並びに学会役員の皆様に、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

最後になりましたが、本大会にお越しくださいました参加者の皆様に、実行委員一同、厚くお礼申し上げます。

第Ⅰ部　基調講演
「英語授業のマネジメントの心・技・愛
ー小・中・高・大で変わらないこと」
講師：正頭 英和先生（立命館小学校教諭）

2014 年の 11 月に静哲人先生、小林翔先生と伴に『英語授業の心・技・愛—小・中・高・大で変わらないこと』を出版された正頭先生から「英語授業マネジメントの心・技・愛」について、さまざまな例を出しながらお話しいただきました。

以前は中学校、現在は小学校で勤務されている正頭先生が現場で生徒に向き合い、感じられたこと等のお話を伺うとともに、先生から参加者に繰り出されるさまざまな問いかけにフロアが積極的に参加し、講師とフロアが一体となった 1 時間半でした。

講演はまずペアでの意見交換で始まりました。所定時間終了後、正頭先生はフロアに「二人は同じ分量で話しましたか？」と質問されました。この問いかけに「はい」と答えられるペアはほとんどありませんでした。正頭先生は、「ペアワークで積極的でない生徒がいる」と教師はよく言うけれども、そのわりには「同じ分量で話しましょう」と具体的に指示をしていないことが多いのではないかと指摘されました。この言葉を聞いて、自分の実践を振り返って見ると、確かに具体的な指示に欠けていることに気づきました。また、教師の常套句である「ちゃんとしなさい！」。この「ちゃんと」を果たして生徒と教師が同じ意味で理解しているのでしょうかと正頭先生はフロアに問いかけられました。これも答えに窮する質問でした。ペアワークと正頭先生からの質問を通して、自分は本当に明確で具体的な指示を与えているのだろうかと改めて見つめ直しました。

次に、「なぜ文法を学ぶ必要があるのか」という生徒からの質問に何と答えるのか。これは、ばらばらに書かれた数字を 1 から順番に印をつけていく「体感メソッド」を使って説明してくださいました。体感することで納得できると感心した参加者も多かったことと思います。
更に、エコグラムのチェックリストでは、自分が知らない自身の長所と短所に気づくかされ、大変盛り上がりました。

厳しいながらも本当に愛ある「授業マネジメント」の講演の間に、私は何度も自問自答し、教師としてのあるべき姿を改めて考え直すことができました。きっと多くの参加者が、私と同じように、教師としての自分自身を振り返る大変貴重な機会を得たと感じたのではないでしょうか。

（文責：山中 由香）

『英語授業の心・技・愛』
—小・中・高・大で変わらないこと（研究社 2014）
指導技術の前に、授業は愛！
＜目次＞
第1章　教師としての心を持つ
第2章　授業の基本をおさえる
第3章　音声指導の基本をおさえる
第4章　授業方法を工夫する
第5章　宿題・テストをうまく使う

第Ⅱ部　基調講演
「音声指導の心・技・愛
―汝の部屋を掃除せよ、そして汝の生徒を愛せよ」
講師：静　哲人先生（大東文化大学 教授）

講演では、静流「英語授業」シリーズ第三弾として研究社より出版された最新御著書、『英語授業の心・技・愛』より音声指導の基本について、ワークショップ形式でお話をいただきました。副題の「汝の部屋を掃除せよ」には、「汚部屋に住んでいる人間は、他人の部屋が汚くても気にならない。発音の下手な教師は他人の発音がいい加減でも気にならないし、そもそも気づかない」という静先生の英語教師への熱いメッセージが込められています。

まず始めに英語教師に必要な８つの音声指導力について述べられた後、独自の音声指導に関するお考えを具体的な例を示しながら説明くださいました。World Englishes に対しては、「日本人以外の非英語話者たちの英語も聞きにくいのだから、私たちも聞きにくくていいという理論は、はたして教育としていかがなものか？」であるとか、「授業は稽古！授業の前と後で生徒が変容することが授業なのだから、生徒たちが良く変わるためのフィードバックをすることが教師の仕事」といった熱い静節が炸裂。

講演後半は、Katy Perry の曲 “Roar”を用いて音声指導の実際を実演くださり、私たち参加者は皆幸運にもその熱い指導を受ける機会を得ました。フロアからも積極的に質問や意見が出され、先生はその一つ一つに丁寧に答えていらっしゃいました。その中で、「私は音声矯正屋であり文法指導屋。狭い範囲で貢献したい」と答えられたのがとても印象的でした。

最後に、「英語を好きにさせようとせず、教師自身が楽しそうにしていることが大切」という参加者への励ましの言葉で講演を締めくくられました。先生の心・技・愛を感じる濃密な一時でした。

（文責：近藤 睦美）

「研究会 2015」開催報告
―6・21 から始まる「知」の追求、そして「和」の追求―

2015 年 6 月 21 日（日）、千里山キャンパス岩崎記念館において、関西大学外国語教育学会研究会 2015 が開催されました。テーマは『6・21 から始まる「知」の追求、そして「和」の追求』で、第Ⅰ部の講師に外国語教育研究科の修了生である近藤睦美先生（帝塚山学院大学准教授）を、第Ⅱ部の講師に山本 祐太氏 (関西大学大学院外国語教育学研究科 博士課程前期課程 2 年生）をお迎えし、研究のティップスを紹介していただきました。

現役の大学院生であれ修了生であれ、研究活動をするにあたって誰しも頭を悩ませるのが研究発表の場でのわかりやすいプレゼンテーションと文献の整理ではないでしょうか。
第Ⅰ部の近藤先生の講演では、近藤先生ご自身がプレゼンテーションをする際に肝に銘じていることについてのお話の後、小グループに分かれて即興で発表に挑戦しました。第Ⅱ部の山本氏のワークショップでは、山本氏が普段利用している文献管理ソフト（MENDELEY)を紹介していただき、実際にダウンロードして使ってみました。いずれの活動も研究に直結するものであり、皆、熱心に取り組んでいました。

参加者に惜しみなくティップスをシェアしてくださった近藤先生、山本氏に心から感謝いたします。最後になりましたが、研究会に参加してくださった皆様に、実行委員一同、厚くお礼申し上げます。

（文責：戎 妙子）

第 I 部 講演
「人を惹きつけるプレゼンテーション」
講師:近藤 睦美先生 （帝塚山学院大学 准教授）

講師の近藤先生は関西大学大学院外国語教育学研究科の修了生で、講演の冒頭、本学会の名誉会長 齋藤栄二先生とのエピソードを紹介してくださいました。近藤先生は、齋藤先生から「多忙な時でも、自分のスキルを鍛え、広げていくために、何かをお願いされた時は“YES”と答える」ことを教訓として学ばれ、今もなお、それを実践するよう心がけていらっしゃるそうです。その信念のもと、今回の講演依頼を受けてくださった近藤先生のように、私も何かお願いされた際には、快く引き受け、自らのスキル向上につなげていきたいと感じました。

閑話休題、講演のテーマであるプレゼンテーションに関してのお話では、特に大学院生に必要な「研究発表」をする際のプレゼンテーションの仕方について、近藤先生の考えを披露してくださいました。

まず、研究発表が行われるゼミや学会へ参加する意義として、他者の発表を聞くこと、他者の発表に対する質問を聞くこと・自ら質問をすること、人脈を広げること、情報収集を行うこと、そして研究へのモチベーションを上げることを挙げられました。加えて、このような場で、発表者として自らの研究についてプレゼンテーションをすることで、自身の研究の促進、他者の評価を聞くこと、研究業績を積むこともできると研究発表をすることの大切さも喚起されました。

以上のような貴重な場でプレゼンテーションを行う際の注意点として、Mitchell (2010)を引用して、次の避けるべき 7 つのタイプを示されました。

① The “I want to tell you everything” presentation
② The “grab bag” presentation
③ The “shopping list” presentation
④ The “meringue” presentation
⑤ The “race against the clock” presentation
⑥ The “mystery novel” presentation
⑦ The “perpetually taxi-ing” presentation

講演後半では、この 7 つの避けるべき事柄と”K.I.S.S (Keep It Simple Stupid)”の法則に気を付けながら、実際にそれぞれの研究内容について、2 分間プレゼンテーションを行いました。やり方は、小グループに分かれ、3 枚の紙（葉書程度の大きさ）にキーワードを書き、それを提示しながら、発表するといった形式でした。参加者は、各々自分の研究について、初めて会う人に、時間内に分かりやすく伝えようと頑張っていました。

最後に、人を惹きつけるプレゼンテーションをするために 1 番大切なことは、「すべての過程において、聞き手の立場で考える事が重要である」と締めくくられました。

今回の講演は、現役の大学院生には、これからの研究発表の参考に、そしてベテランの研究者の方々には、ご自身のプレゼンテーションを振り返るいい機会になったのではないかと感じました。

（文責：田中 絵理佳）

第Ⅱ部 ワークショップ
「知らなきゃ損！論文の探し方、データ保存の仕方」
講師:山本 祐太氏（関西大学大学院 博士課程前期課程 2 年生）

研究会の第Ⅱ部では「知らなきゃ損！論文の探し方・データの保存の仕方」と題して、博士課程前期課程 2 年生の山本祐太氏によるワークショップが行われました。
対象は前期課程 1 年生という前提でしたが、効率的な先行研究の管理・保存の仕方を模索している全ての参加者にとって非常に有益なワークショップでした。

発表は、①論文ってなぜ読むの？②論文ってなぜ引用するの？③論文の探し方（一例）、④APA 形式での引用を助けてくれるサイト、 ⑤ダウンロードした論文を整理するためのソフト（この部分がメインのワークショップでした）、⑥最後に。という流れで行われました。ユニークなトークも交えての「研究における基本の〈き〉」からのお話に、終始和やかにワークショップが進みました。

メインのワークは、まず、参加者が実際にパソコンを使用し、フリーの文献管理ソフト「MENDELEY」（http://www.mendeley.com/）をダウンロードするところから始まりました。山本氏曰く「MENDELEY」を使う最大のメリットは、様々な文献データベースから pdf ファイルをダウンロードすると、文献情報（著者名、タイトル、発表されたジャーナル名など）をある程度自動的に取り込んでくれる点と検索が可能な点だそうです。また、今回のワークショップでは皆「MENDELEY」の Web 版を利用しましたが、デスクトップ版もあり、同期させれば、ネットにつながっていてもいなくても文献管理が一元化してできることも魅力だそうです。

全員が無事ダウンロードできた段階で、次に、実際に関西大学図書館のデータベースポータルや CiNii で論文を検索し、それを MENDELEY に取り込んでみました。更には、関西大学の英語教育では、文献の引用には APA 形式が用いられているので、取り込んだ論文の文献情報を APA 形式に変換する方法（これは機械に頼りすぎずに必ず最後には自分の目でチェックすることが重要です）といった「便利ツール」まで教えていただきました。

今回の研究会は、この活動が、外教学会のコンセプトの一つである修了生と在学生を繋ぐ場となっていることを改めて感じる研究会でした。

（文責:竹田 里香）

学会からのお知らせ　その1

第 10 回 記念研究大会開催

本学会も 2016 年で設立 10 年。この節目の年を記念して来る 3 月 5 日(土)に記念研究大会を開催する運びとなりました。テーマは「20 年後の外国語教育を見据えて」

基調講演には外国語教育学研究科長　竹内理教授、基調講演に続くシンポジウムには山崎直樹教授、池田真生子准教授をお招きして、これからの外国語教育について多いに語っていただく予定です。
詳細は決まり次第、学会のホームページ及びメーリングリストでお知らせいたしますので、今から予定表に記入願います。会場で皆様にお会いできることを実行委員一同楽しみにしております。

学会からのお知らせ　その2

6 月 21 日の総会で、以下のメンバーが新役員として承認されました。今年度もどうぞよろしくお願いします。

役　職	役　　員			
名誉会長	齋藤　栄二 教授			
会　長	吉田　信介 教授			
総務委員会	近藤　睦美*			
財務委員会	名部井　敏代 教授*	森元　靖	筒井　紗稀	高　英麗
研究大会委員会	竹田　里香*	阿部　慎太郎	田中　絵理佳	
広報通信委員会	戎　妙子*	山本　祐太	中村　あずさ	
紀要委員会	山中　由香*			
監　査	山崎　直樹 教授	沈　国威 教授		
幹事長	神道　美映子			

*印は委員長

学会からのお知らせ　その3

Newsletter をデジタル配信へ

これまで郵送で Newsletter をお手元にお届けしてきましたが、今後はデジタル配信に一本化する運びとなりました。紙媒体では予算の関係上紙面に限りがありましたが、デジタルに移行することでその制約がなくなりますし、即時性も高められます。
今後は、会員の皆様に原稿を寄せていただくなど、新しい企画をして紙面の充実を図りたいと思っております。

＜編集後記＞
広報通信委員長として Newsletter の編集やホームページの管理を手がけてくださった船越さんからその役を託されました。精進を重ねてまいりますので、皆様よろしくお願いいたします。
最後になりましたが、ここに、改めて船越さんに感謝の意を表します。長い間ありがとうございました。(E)